



沖合漁場ではケンサキイカが豊漁、 今後の沿岸イカ釣り漁業での好漁に期待！

沖合漁場ではケンサキイカが豊漁

浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業（沖底）が操業する沖合漁場（島根県西部沖～山口県沖）では、今年（2021年）に入ってケンサキイカ（図1、地方名：シロイカ、マイカなど）が記録的な豊漁となりました。沖底による2021年（令和3年）1月から4月までの間のケンサキイカの漁獲量は277トンで（図2）、前年（2020年の同期間：44トン）の6.3倍、過去10年間（2011年～2020年の同期間の平均：60トン）の4.6倍となりました。また、統計データが揃う1998年以降では、これまで最も多かった2005年の216トンを上回り、最高値を記録しました。



図1 沖合底びき網漁業で漁獲されたケンサキイカ

沖底の操業は休漁期間（6月1日から8月15日の2ヶ月半）を除いた期間で行われ、ケンサキイカだけでなくカレイ類やアカムツ（地方名：ノドグロ）など様々な魚種を漁獲します。便宜的に1月から5月までを漁期前半、8月から12月までを漁期後半とすると、ケンサキイカは2005年以前は漁期前半に多く漁獲されていましたが、2006年以降はこのパターンが変化し、漁期後半に多く漁獲されるようになりました。ところが2019年と2020年の漁期後半は記録的な不漁となり、漁業関係者の間ではケンサキイカ資源の急変が危惧されていました。ケンサキイカ資源は、山陰沿岸に來遊する時期によって3つの季

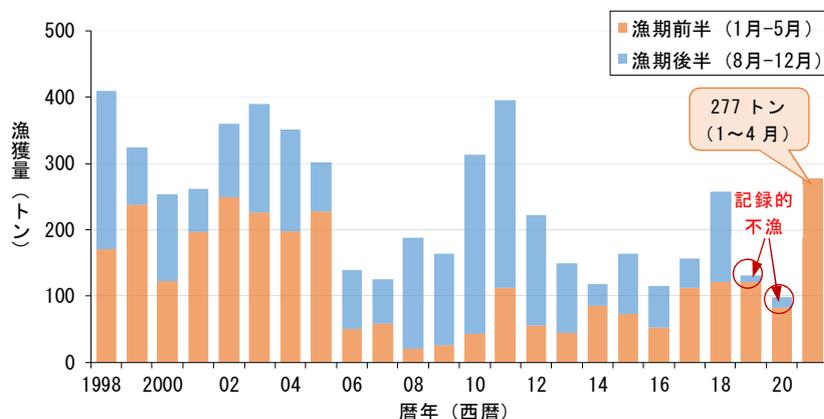


図2 浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業のケンサキイカの漁獲動向（2021年の漁期前半は1月～4月の集計値）

節群（春季成熟群、夏季成熟群及び秋季未熟群）に大別されると考えられています。これら季節群の詳細な生態は完全には解明されていませんが、漁期後半の漁獲が2年連続して不漁で終わった直後に、漁期前半の漁獲が記録的な豊漁になったことは、漁獲パターンの変化の兆しかもしれません。

今後の沿岸イカ釣り漁業は好漁が期待！

例年5月～6月になると沿岸漁場でケンサキイカを対象としたイカ釣り漁業が本格化し始めます。沖合漁場でみられた豊漁は、今後の沿岸漁場でのイカ釣り漁業の漁模様にどう関係するのでしょうか。

以前からケンサキイカの沖合漁場での漁獲動向と沿岸漁場での漁獲動向に関連があると考えられています。そこで、5月～7月の県内のイカ釣り漁業でのケンサキイカ漁獲量について、2月～4月の沖底1ヶ統あたりのケンサキイカ漁獲量との関係を調べました。その結果、これらの間には図3のような正の相関関係があることがわかりました。このことは、ケンサキイカの漁況に関して、2月～4月の沖底での漁獲が好調であれば、5月～7月の沿岸イカ釣り漁業でも好調になる傾向があることを示しています。

ケンサキイカは単年性で寿命は1年程度と考えられています。沿岸イカ釣り漁業で5月～7月に漁獲されるケンサキイカは、生後8ヶ月以上の比較的大型のものが主体です。沖底で2月～4月に漁獲されるケンサキイカの大半は生後6ヶ月から7ヶ月のもので、これらが数ヶ月後に成長して沿岸漁場に来遊し、イカ釣り漁業の漁獲対象になると考えれば、この関係性は統計学的だけでなく生物学的にも妥当だと言えます。

2021年2月～4月の沖底1ヶ統あたりのケンサキイカ漁獲量は64トンで、過去10年間（2011年～2020年の同期間）の平均（11トン）を大きく上回りました。図3の関係性から考えると、今後の沿岸漁場でのイカ釣り漁業の漁模様は好調に推移することが期待できそうです。

沿岸イカ釣り漁業では昨年（2020年）、一昨年（2019年）と2年連続して秋季のケンサキイカ漁は不振が続いていますので、この情報が沿岸漁業者の皆さんの一助になれば幸いです。

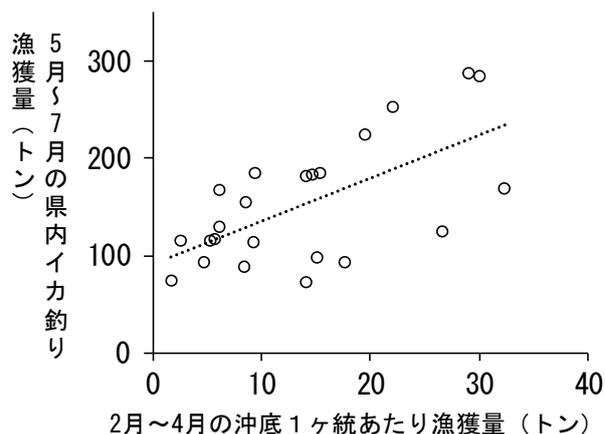


図3 1998年～2020年の沖底1ヶ統あたりの2月～4月のケンサキイカ漁獲量と県内イカ釣り漁業での5月～7月のケンサキイカ漁獲量の関係

島根県水産技術センター 島根県浜田市瀬戸ヶ島町 25-1

TEL:(0855)22-1720 FAX:(0855)23-2079

ホームページ: <https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> →

E-mail: suigi@pref.shimane.lg.jp

